

日医ニュース

No. 1364
2018. 7. 5

発行所 **日本医師会**
Japan Medical Association
〒113-8621 東京都文京区本駒込2-28-16
電話 03-3946-2121(代)
FAX 03-3946-6295
E-mail wwwinfo@po.med.or.jp
http://www.med.or.jp/
毎月2回 5日・20日発行 定価 2,400円/年(郵税共)



● 定例記者会見	2~3面
● 都道府県医師会 予防・健康づくり (公衆衛生) 担当理事 連絡協議会	3面
● 男女共同参画フォーラム	5面

本協議会は、本年3月に会内の医師会組織強化検討委員会が取りまとめた「医師会組織強化に向けた検討結果(報告・提言)」を受けて初めて開催されたもので、医師会の基本的事業と社会的役割、入会の意義などについての理解を深め、意識の共有と業務の一層の円滑化を図り、医師会の組織強化を推進することを目的としている。

今村副会長の司会で開かれた横倉会長は、研修医会員の会費無料化や入会メリット等をまとめたパブリックコメントの作成等の提言の他、各種調査などを行ってきた医師会組織強化検討委員会に謝意を示した上で、昨年12月に日医会員数が初めて17万人を超えたことを報告。一方、都道府県医師会の会員で日医に未入会の医師

が約1万7000人、郡市区等医師会の会員で日医に未入会の医師が約3万人いることから、我々が考える、国民視点に立った医療の実現に向けて、更なる組織率の向上によって実効性を高めていくことが重要である。郡市区等医師会に入会された方には、日医まで入会して頂きたいと願っており、郡市区等医師会にも属さない約12万人の医

師にも働き掛けていくことが重要と考えている」と述べた。また、平成27年の同委員会報告書において、「Face to Faceのコミュニケーションこそ、未入会の医師に入会を促すためには最も効果的」との提言があったことに触れ、「入退会手続きの窓口となる郡市区等医師会や、大学とも太いパイプをもつ都道府県医師会にも協力をお願いしたい。とりわけ、全ての医師会の役割に、医師会の目的や事業を再認識し、医師会組織強化に向けた思いを共有して頂くことが、更なる組織率の向上につながる」として、本協議会の充実を期待させた。

今村副会長は、まず、医師会の三層構造(日医の会員資格は都道府県医師会の会員であることと、郡市区等医師会の会員であることと定められている)について説明し、医師会への入口となる郡市区等医師会の窓口での対応が

きるよう、訴訟や示談などの交渉を代行する仕組みが整っている、②については日医医師年金制度があり、非営利、非課税、一口コストによる効率的な資産運用が行われ、医師のライフスタイルに合わせた受け取りの設計が可能など、メリットが大きい、③については、日医生涯教育制度によって最新の医学・医療が学び続けられる環境を整えている、④については、女性医師が日医会員である割合を都道府県別に見ると、100%から50%程度と地域差が大きいとして、郡市区等医師会加入割合と日医加入割合のどちらも100%に近づけるような取り組みが必要とした。

医師会の役割については、(1)国民の生命と健康を守る、(2)医師の医療活動を支える——ことにあるとするともに、会員を支えるため、①診療の生活②学習④女性医師——の面からサポート事業を展開していることを解説した。

秋田県では、郡市区医師会の会員が全て日医の会員であるため、日医が各郡市区医師会の会員

その後のフロアとの質疑では、会費のあり方や税制上の取り扱いを巡り議論が交わされた他、各地で模索されている研修医会員の継続入会への取り組みや、医師会員であるメリットを増やす取り組みなども報告された。



都道府県医師会組織強化担当役員連絡協議会が6月8日、日医会館大講堂で開催された。当日は、横倉義武会長のあいさつに引き続き、今村聡副会長が、日医が組織強化を図る意義について講演し、組織率向上への協力を求めた他、秋田県・東京都両医師会から組織強化に向けた取り組み事例の報告が行われた。

また、郡市区等医師会が日医会員である割合を都道府県別に見ると、100%から50%程度と地域差が大きいとして、郡市区等医師会加入割合と日医加入割合のどちらも100%に近づけるような取り組みが必要とした。

更に同副会長は、日医が数多くの国の審議会等に参画していることを示し、「現場を知らない政治家や官僚だけに医療政策を任せると、財政優先・医療の営利産業化など、患者のデメリットにつながる方向へ向かってしまう」と指摘。医療現場からの意見を届け、より良い医療政策の実現に寄与することが日医の役割であり、組織率の向上によってその発言力が高められるとして、各地域の実情に応じたきめ細やかな組織強化対策を求めた。

この他、平成27年度より研修医会員への日医会費無料化、30年度より日医医師賠償保険料引き下げに伴う日医会費の改定を実施しているとした。

名簿を把握しており、県内の異動であれば簡単に手続き等ができる状況にあるが、実際には会員が入退会する郡市区医師会にそれぞれ届け出を行っている。このため、現行の「入会申込書」「退会届出書」「異動報告書」を一枚に集約し、県内で異動する場合、会員は県医師会に書類を提出、県医師会から入退会する郡市区医師会に報告する案を検討しているとし、「その実現のためにも、一度県医師会に入会した会員は、県内各郡市区医師会に理事等での審査をすることなく、入会できるような協力を求めていく」と述べた。

角田都医副会長は、12の大学医師会、8病院からなる都立病院医師会が構成されている都医の特殊性に触れ、大学医師会との連携のため、都医役員に大学理事を設けている他、12大学医師会と都医理事との連絡協議会を開催していることなどを概説。医学生や次世代の医師育成、支援体制の充実に向け、「(1)毎年、大学キャンパスで「医学生、研修医等をサポートするための会」を開催、

(2)5大学で都医役員による医学生への講義を実施、(3)医学生のサークル活動支援の一環として都医会館利用を推進、(4)医学生らの活動(地域公衆衛生あるいは社会・文化領域)を顕彰並びに助成金を提供——していることを紹介した。

都道府県医師会組織強化担当役員連絡協議会 より良い医療政策を実現するため 更なる組織率の向上を



五十嵐秋田県医常任理事



角田都医副会長

日医 定例記者会見

6月6日

「骨太の方針2018」 （原案）等に対する 日医の考えを説明



横倉義武会長は、6月5日に経済財政諮問会議に提出された「経済財政運営と改革の基本方針2018」（いわゆる「骨太の方針2018」）（原案）等に対する日医の考えを説明した。

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

医業税制検討委員会答申

「医療における 税制上の諸課題および あるべき税制」について



今村聡副会長は、医業税制検討委員会が答申を取りまとめた5月30日に、品川芳宣同委員会委員長（筑波大学名誉教授／弁護士）より横倉義武会長宛てに答申したことを報告し、その概要を説明した。

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

同日は、

公衆衛生委員会答申 「健康寿命延伸のための 予防・健康づくりの あり方」まとまる



命の考え方、(2)健康寿命の延伸に必要な取組の二つの視点で取りまとめられている。

羽鳥裕常任理事は、公衆衛生委員会が会長諮問「健康寿命延伸のための予防・健康づくりのあり方」に対する答申を取りまとめ、5月30日に角田徹委員長(東京都医師会副会長)から横倉義武会長に手交したことを報告した。

答申は、(1)健康寿命

答申と提言

1. 多様化している健康への価値観を認めながら、健康・健康寿命の意義を理解し、個々の幸福な生活が実現できるよう、その意識・自主的な活動を広め、環境整備等を進めること
2. 正確な情報を判断し実践できる、自己の「健康概念と行動力」を有する国民の増加を目指し、教育現場・住民活動等へのより一層のかかりつけ医としての会員の関与を進めること
3. 行政や関係団体・組織と協働した、住民参加型で楽しい活動等を地域ぐるみで開催し、予防や必要な医療につなげられるように、その支援と理解を進めること
4. 具体的な施策目標としては、喫煙対策と運動習慣の獲得及びフレイル予防(食べて動いて交わる)を進め、国民的理解を更に深めること

では、客観的なデータを使うことが望ましいとして、介護認定データを基にした65歳時の平均自立余命を活用することを提案し、その概要を説明するとともに、他方式との比較を行っている。

(2)では、予防すべき疾病・状態等として、①動脈硬化②糖尿病③認知症④うつ病⑤喫煙⑥フレイル——の六つを挙げ、これらに対する取り組みが重要であるとしている。集団に対しては全分野的に、個人に対しては全人的に関わる必要があるとして、それを可能にするのが地域の医師会、かかりつけ医であり、その役割は極めて重要であるとしている。

また、地域全体での予防・健康づくりの取り組みの推進が必要であるが、地域では医師会側からの働き掛けで行政や関係機関が積極的に動き出すことも多く、多職種連携の推進のために医師会が中心的役割を果たす必要があるとしている。

羽鳥常任理事は、答申では議論の整理を踏まえ四つの提言(別掲)が行われていることについて、「かかりつけ医による健康啓発、行政と関係団体等との協働による取り組みの推進など、日医としても各地域における取り組みの推進に向け、引き続き尽力していきたい」と述べた。

都道府県医師会予防・健康づくり(公衆衛生)担当理事連絡協議会

地域住民の健康課題に対応するため 都道府県版日本健康会議の設置を



都道府県医師会予防・健康づくり(公衆衛生)担当理事連絡協議会が6月15日、日医会館小講堂で開催された。

担当の羽鳥裕常任理事の司会で開会。冒頭あいさつした横倉義武会長は今回の連絡協議会について、「地域住民の健康課題にきめ細かく対応するためには、各地域においても日本健康会議のような体制を構築してもらい、地域の実情に合った

の経緯等を説明した上で、同会議が策定した「健康なまち・職場づくりの宣言2020」について、「医療費が一律に抑制されることを避け、無駄なものも排除する一方、必要な医療費を確保するために策定したものである」と強調。都道府県版日本健康会議に関する議論は、「経済財政運営と改革の基本方針2018」でも触れられており、今年度は5、6カ所で開催したいと考えている。ぜひ協力をお願いしたい」と述べた。

更に、保険者協議会への都道府県医師会の積極的な参加を要請。「医師会が中心となって、『糖尿病の重症化予防』『特定健診の受診率向上』『良質な後発医薬品の普及・促進』に取り組んで欲しい」とした。

3県医から地域における活動事例を報告

地域における活動事例の報告では、まず、佐藤和宏宮城県医師会副会長が、「産官学が一体となって健康づくりを推進していくため、平成28年2月に『スマートみやぎ健

民会議』を設立した②重点的に取り組むテーマとして、『1日15分(1500歩)歩くこと』を掲げている——ことなどを紹介。「この取り組みが一過性のものとならないよう、効果的な取り組みの実現を目指して、県医師会としても専門的な立場からサポートしていきたい」とした。

その後の総合討論では、「予防・健康づくりの成功のためには、医師の積極的な関与が不可欠」「生活習慣病対策は今後の認知症予防にもつながるという意識をもって、取り組むことが重要」「小さい時からの健康教育が大事になる」といった意見が出された。

石黒成人高知県医師会常任理事は、県民の健康増進に向け、官民協働で推進している、楽しみながら健康的な生活を習慣化できる「高知健康パースポット事業」や未治療ハイリスク者や治療中断者への受診勧奨を全県的に進めていることなどを説明。県民が住み慣れた地域で、安心して暮らし続けていくためにも、県医師会として、引き続き全面的に協力していく意向を示した。

最後に今村聡副会長が、「予防・健康づくりは全ての関係者が同じ方向を向いて取り組んでいくことが必要になる。まずは地域の現状の見える化を行い、関係者が参加し、各地域で必要な取り組みができるよう、都道府県版日本健康会議の設置を検討して欲しい」と総括し、協議会は終了となった。

ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC) 国際シンポジウムに

横倉会長が世界医師会会長として出席



UHC国際シンポジウム

の社会的決定要因に基づく行動を通じ、健康関連の人権を積極的に推進し、世界中の全ての人が、医の倫理を十分に尊重することが保証されていること等に触れ、この賞書の締結により、WMA、WHOの両機関が協力、連携してUHCを具体的に推進していくことができるものと期待している」とした。

さらされる医療)のセッションにオトマー・ク

H O総会会場を訪問し、総会議場を視察した他、

ロイパーWMA事務総長と共に出席した。

また、国連欧州本部におけるWガン・キムヨシシガポール保健大臣、エマール・ロバート・パラオ共和国保健大臣らと懇談し、9月のWHO西太平洋地域事務局(WPRO)事務局局長選挙に立候補している葛西健WPRO次長への支援を依頼した。

参加者は三つのテーマ(Ⅰ.災害時の病院としての能力、Ⅱ.災害時の運用方法、Ⅲ.平時の運用)ごとに分かれ、石川常任理事は、西医師会の役員と共に第1班に参画した。

当日の午前中は、船内見学が行われ、手術室、CT室、ICU等の設備や運用について説明を受けた。

1での患者搬送訓練が実施され、患者の手術室までの搬送、緊急手術等についてデモンストレーションが行われた。

午後からはヘリポートから除染までの流れについて、担当官より、ヘリによる着艦後に患者に行うトリアージ、除染、除染状態の確認やレポート作成等について実演を含む説明が行われた。

第71回WHO総会の開催に併せ、世界医師会(WMA)と台湾医師会共催による「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ国際シンポジウム」が5月22日、スイスのジュネーブにおいて行われ、横倉義武会長が道永麻里常任理事と共に出席した。

冒頭、横倉会長はWMA会長としてあいさつし、4月5日に、テドロスWHO事務局長との間でUHCの推進と緊急災害対策の強化を目的とした賞書を締結したことを報告。賞書では、「健康

が協力、連携してUHCを具体的に推進していくことができるものと期待している」とした。

同日の午後、横倉会長と道永常任理事は、WMAのサポートにより、赤十字国際委員会(ICRC)が開催した「Health Care in Danger(危機に

また、猪口正孝都医副会長も災害医療コーディネーターとして参画した。

その後、海上自衛隊との協働によるヘリコプターの搬送、緊急手術等についてデモンストレーションが行われた。

最後に、ジョン・ロトラック米国海軍病院船病院長(大佐)を筆頭とする医療担当者との間で、災害時に有効であった機能、船内設備、勤務体系、派遣先国との指揮命令系統、災害派遣時に搭載する医療機器・薬品等やヘリ・パイロットの除染などについて、活発かつ有意義な質疑応答が行われた。

米国海軍病院船「マーシー」の東京港寄港に係るセミナー 石川常任理事がJMATとして参加



病院船「マーシー」

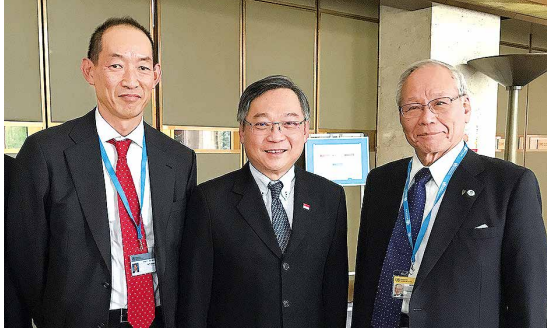
ど計1000床、手術室12室、CTを有し、サン

また、猪口正孝都医副会長も災害医療コーディネーターとして参画した。

その後、海上自衛隊との協働によるヘリコプターの搬送、緊急手術等についてデモンストレーションが行われた。

最後に、ジョン・ロトラック米国海軍病院船病院長(大佐)を筆頭とする医療担当者との間で、災害時に有効であった機能、船内設備、勤務体系、派遣先国との指揮命令系統、災害派遣時に搭載する医療機器・薬品等やヘリ・パイロットの除染などについて、活発かつ有意義な質疑応答が行われた。

また、猪口正孝都医副会長も災害医療コーディネーターとして参画した。



WHO総会会場前にて、ガン・キムヨシシガポール保健大臣(中央)、葛西健WPRO次長と

米国海軍病院船「マーシー(Mercy)」が6月16、17の両日、日本政府の招きで東京港に寄港し、レセプション及びセミナーが行われた。

同日の米国主催の歓迎レセプションには、招待



セミナーに参加する石川常任理事(左)

また、猪口正孝都医副会長も災害医療コーディネーターとして参画した。

その後、海上自衛隊との協働によるヘリコプターの搬送、緊急手術等についてデモンストレーションが行われた。

最後に、ジョン・ロトラック米国海軍病院船病院長(大佐)を筆頭とする医療担当者との間で、災害時に有効であった機能、船内設備、勤務体系、派遣先国との指揮命令系統、災害派遣時に搭載する医療機器・薬品等やヘリ・パイロットの除染などについて、活発かつ有意義な質疑応答が行われた。



説明を行うロトラック病院長(左端)

総務課(人事・労務) 03-3942-6493・総務課 03-3942-6481/03-3942-6477・施設課 03-3942-7027・経理課 03-3942-6486・広報課 03-3942-6483・情報システム課 03-3942-6135・医療保険課 03-3942-6490
介護保険課 03-3942-6491・年金・税制課 03-3942-6487・生涯教育課 03-3942-6139・編集企画室 03-3942-6140・情報サービス課 03-3942-6482・医学図書館 03-3942-6489

第14回男女共同参画フォーラム

「次世代がさらに輝ける医療環境をめざして ～超高齢社会で若者に期待する～」をテーマに



第14回男女共同参画フォーラムが5月26日、高知市内で開催された。

第14回男女共同参画フォーラムが5月26日、高知市内で開催された。田村章高知県医師会副会長が開会を宣言。続いてあいさつに立った横倉義武会長は、昨年、日医の男女共同参画委員会と女性医師支援センターが共同で、国内の全病院に勤務する女性医師を対象

第14回 男女共同参画フォーラム 宣言

少子高齢化が進んだ我が国において、特に地方での医師の高齢化、医師不足、地域偏在、診療科偏在は、国民が十分な医療を受けられないという危機を引き起こしており、現在その対策が急がれているところである。

女性医師の割合は増加しており、その活躍をいかに支援するかが重要であることはもはや共通認識となっている。しかし、女性医師を取り巻く環境は改善してきている一方、意識改革についてはこれからの時間をかけて取り組まなくてはならない課題である。多様なキャリア形成を支援するには医療にかかわる全ての人々の理解が不可欠であり、早期からの教育や啓発が必要である。そして、男女の差なく若手医師が将来に希望を持ち、それぞれの地域でやりがいのある勤務環境を創ることが求められている。

私たちは、医療界においての真の男女共同参画を実現するべく、男女の相互理解のもと豊かな心を持ち、多様な価値観を受け入れ、真摯に学び続け、医療のあるべき未来を逞しく切り拓く人材を育成する体制作りを進めることをここに宣言する。

平成30年5月26日
日本医師会 第14回男女共同参画フォーラム

「8年ぶりに実施した女性医師の勤務環境の現況に関する調査」について触れ、「男女共同参画は経済政策としての女性の活躍を推進していくものではなく、女性であることが断念するでキャリアを断念する」ことがないような環境を整え、共に未来の医療を支えていくことが重要である」と述べ、日医でも引き続き、男女共同参画に積極的に取り組んでいく姿勢を示した。

また、医師自らも働き方を考え、変えていく時期にきているとして、会内に「医師の働き方検討委員会」を設置して検討を重ね、4月に答申が取りまとめられたこと言及。その上で、「今後も地域医療を守り、勤務医の健康を守る制度を構築するため、会内に新たに設置した『医師の働き方検討会議』で更に検討を続け、厚生労働省の検討会等に医療界の総意として提示できるように、しっかりと議論を行っていきたい」と述べた。

岡林弘毅高知県医師会会長は、「長時間労働の改善に向けた働き方改革が論議されているが、医師も例外ではない。女性が働くための環境整備も大切であり、女性医師の活躍を後押しするために、その働き方や就労支援に一つひとつ対応していかねばならない」と述べた上で、本フォーラムが、医療環境の改善と地域の活性化、国民の健康増進に寄与することに期待を寄せた。

来賓の尾崎正直高知県知事(岩城孝章高知県副知事代読)は、同県では、県の基本政策の一つとして「女性の活躍の場の拡大」を掲げており、院内保育所の運営に対する助成や、女性医師の復職に向けた研修、医療機関の勤務環境改善に積極的に取り組んでいると説明。「今回のフォーラムのメインテーマである『次世代がさらに輝ける医療環境』を指して、今後

こうした取り組みを強化していきたい」とあいさつした。

基調講演「次世代につながる生命科学とは」

基調講演「次世代につながる生命科学とは」は、高橋淑子京都大学大学院理学研究科生物物理学専攻動物学教室教授が、生命科学者の立場から、発生の仕組みやアプローチの仕方について、自身が行っている研究の様子を実際の映像を交えながら解説した。

高橋教授は、「発生の物理学は、さまざまな遺伝子の発現やiPS細胞に代表されるような再生医学に大きく貢献してきたのは言うまでもない」と説明。その上で、「創造性豊かな研究こそが次世代を支える」と述べ、「若者が次世代の科学を牽引するためには、知的活動を伴う強い好奇心の醸成が必要である」と強調した。

「27%が育児休暇を取っていること」を報告した。更に、家庭医療研修中に2回妊娠した女性は、「親になることは人間として大事なことで、医学的知識のみではなく、人間として成長できた」と述べていたことを紹介した。

高知県医師会の活動についてでは、計田香子高知県医師会常任理事が、高知県医師会の男女共同参画の取り組みについて報告を行った他、昭和15年に会員相互の親睦と医道の向上を図ることを目的として、高知県の女性医師25名で発足した高知県女医会の現在の活動状況等を紹介した。

「総合討論」では、シンポジウム5名と会場の参加者たちが熱心なディスカッションを行った。

続いて、第14回男女共同参画フォーラム宣言採択に移り、児玉・岡村両氏が「第14回男女共同参画フォーラム宣言(案)」を読み上げ、満場一致で採択された(別掲)。

その後、次期担当医師会の佐藤和宏宮城県医師会副会長のあいさつに続いて、白井隆高知県医師会副会長が閉会を宣言し、フォーラムは終了となった。参加者は294名。

なお、次回は、平成31年7月27日に仙台市内で開催される予定となっている。

引き続き、「次世代がさらに輝ける医療環境をめざして」をテーマに、引き続き、高知県医師会が主催するシンポジウムが行われた。

「偶然と集いの医療環境マネージメント」高知の試みでは、倉本秋高知医療再生機構理事長が、「医療従事者が高知を基盤に日本で一番の生涯学習、キャリア形成を行える環境を整えたい」との思いから、「高知知にいても」から「高知にいたるからこそ」勉強ができるシステムづくりを目指して、若手医師のキャリア形成支援を実施したところ、県内の研修医のマッチング数がそれまでの約1.5倍に増加したことを報告した。

引き続き、「次世代がさらに輝ける医療環境をめざして」をテーマに、引き続き、高知県医師会が主催するシンポジウムが行われた。

「偶然と集いの医療環境マネージメント」高知の試みでは、倉本秋高知医療再生機構理事長が、「医療従事者が高知を基盤に日本で一番の生涯学習、キャリア形成を行える環境を整えたい」との思いから、「高知知にいても」から「高知にいたるからこそ」勉強ができるシステムづくりを目指して、若手医師のキャリア形成支援を実施したところ、県内の研修医のマッチング数がそれまでの約1.5倍に増加したことを報告した。

「(2)若手医師が考える少子高齢時代のキャリア形成」では、3月まで研修医であった児玉加奈氏が、「地域枠で入学した高知大学では、日常生活、大学での講義や実習、

臨床研修を通じて高齢者と接する機会が多く、少子高齢社会を実感するとともに、少子高齢社会における医療のあり方について、身近なものとして興味を持つことができた」と述べた他、「さまざまな場所で大さんの先輩・同期・後輩に出会い、多種多様な考え方や働き方を見聞きすること、かけがえのない経験だった」と振り返った。

研修医の岡村徹哉氏は、研修医で組織する任意団体「KOCHEIR ESI(コーチェイア)」が行った数々のプロモーションやイベントなどの活動内容を紹介。「フーニティが出来上がれば、新しい世界が見えてくる。そんなヒトの輪が広がれば、さまざまな医療問題は解決すると思う」と述べ、「ヒトのつながり」の重要性を強調した。

(3)大西恵理子オレゴン健康科学大学家庭医療科の現状、米国オレゴン健康科学大学、家庭医療科の現場から」と題して講演し、同大学の家庭医療研修プログラムでは、ジェバディーシステム(欠席の研修医の任務をカバーする仕組み)があること、また、最近10年の統計では、女性研修医の約4人に1人が妊娠しており、男性研修医の

27%が育児休暇を取っていることなどを報告した。

更に、家庭医療研修中に2回妊娠した女性は、「親になることは人間として大事なことで、医学的知識のみではなく、人間として成長できた」と述べていたことを紹介した。

高知県医師会の活動についてでは、計田香子高知県医師会常任理事が、高知県医師会の男女共同参画の取り組みについて報告を行った他、昭和15年に会員相互の親睦と医道の向上を図ることを目的として、高知県の女性医師25名で発足した高知県女医会の現在の活動状況等を紹介した。

続いて、第14回男女共同参画フォーラム宣言採択に移り、児玉・岡村両氏が「第14回男女共同参画フォーラム宣言(案)」を読み上げ、満場一致で採択された(別掲)。

その後、次期担当医師会の佐藤和宏宮城県医師会副会長のあいさつに続いて、白井隆高知県医師会副会長が閉会を宣言し、フォーラムは終了となった。参加者は294名。

なお、次回は、平成31年7月27日に仙台市内で開催される予定となっている。

引き続き、「次世代がさらに輝ける医療環境をめざして」をテーマに、引き続き、高知県医師会が主催するシンポジウムが行われた。

「偶然と集いの医療環境マネージメント」高知の試みでは、倉本秋高知医療再生機構理事長が、「医療従事者が高知を基盤に日本で一番の生涯学習、キャリア形成を行える環境を整えたい」との思いから、「高知知にいても」から「高知にいたるからこそ」勉強ができるシステムづくりを目指して、若手医師のキャリア形成支援を実施したところ、県内の研修医のマッチング数がそれまでの約1.5倍に増加したことを報告した。

引き続き、「次世代がさらに輝ける医療環境をめざして」をテーマに、引き続き、高知県医師会が主催するシンポジウムが行われた。

「偶然と集いの医療環境マネージメント」高知の試みでは、倉本秋高知医療再生機構理事長が、「医療従事者が高知を基盤に日本で一番の生涯学習、キャリア形成を行える環境を整えたい」との思いから、「高知知にいても」から「高知にいたるからこそ」勉強ができるシステムづくりを目指して、若手医師のキャリア形成支援を実施したところ、県内の研修医のマッチング数がそれまでの約1.5倍に増加したことを報告した。

2018年世界禁煙デー記念イベントを開催

「受動喫煙防止はどのように進展させるのか」をテーマに

2018年世界禁煙デー記念イベントが5月31日、「受動喫煙防止はどのように進展させるのか」をテーマとして、日医会館大講堂で開催された。

本イベントは、世界禁煙デー（5月31日）を広くアピールすること、また2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を控え、「受動喫煙防止対策強化」に向けて専門家を招き、施策がどのように進んでいるのか情報を共有し、受動喫煙のない日本を目指すことを目的として開催されたものである。

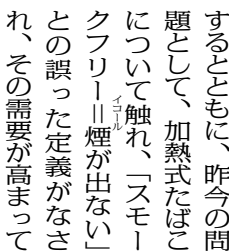
冒頭あいさつで横倉義武会長（代読・今村聡副会長）は、「喫煙は単なるマナーや嗜好の問題ではなく、国民の健康被害の問題として捉えなければならぬ」と強調。「日医としても、国民を始め関係者の理解を得ながら、わが国における受動喫煙対策が一步でも前に進むよう、引き続き取り組んでいきたい」とした。



とを目的として開催されたものである。冒頭あいさつで横倉義武会長（代読・今村聡副会長）は、「喫煙は単なるマナーや嗜好の問題ではなく、国民の健康被害の問題として捉えなければならぬ」と強調。「日医としても、国民を始め関係者の理解を得ながら、わが国における受動喫煙対策が一步でも前に進むよう、引き続き取り組んでいきたい」とした。

小池百合子東京都知事は、東京都医師会が中心となって実施した「東京都受動喫煙防止条例（仮称）」の制定に関する署名活動（以下、署名活動）に対して、感謝の意を表明。国よりも厳しい規制を設けた条例を成立させることへの意欲を示すとともに、本イベントを通じて受動喫煙防止の機運が高まることに期待感を示した。

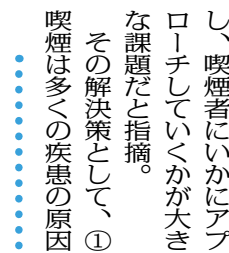
正林督章厚生労働省健康局長は、健康増進法の改正案に触れ、「この法案は禁煙対策が進む仕組みになっている。望まない受動喫煙がない状況で東京オリンピック・パラリンピックを迎えられるよう、ぜひ法案成立への協力をお願いした



望月友美子日本対がん協会理事は、日本の禁煙対策は諸外国に比べて遅れているが、この問題は命に関わる問題として、国全体で取り組むべきとする。昨今の問題として、加熱式たばこについて触れ、「スマートフォンから煙が出ない」との誤った定義がなされ、その需要が高まっていることを危惧。エビデンスが整わない中でも、規制の強化に取り組みべきを考える時にきているとした。

その他、日本対がん協会が、いかなるたばこも決別する社会を実現することを目的として、今年度より「タバコゼロ・ミッション」という取り組みを開始したことを報告。その活動に対する支援と協力を求めた。

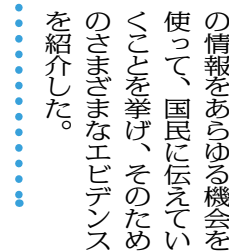
第2部では、特別発言として、松沢成文参議院議員が、国会に提出された健康増進法改正案の実効性に疑問を投げ掛ける一方、東京都の条例案については、面積ではなく、人をたばこの書から守ることに焦点を当てて規制をかけていることを高く評価。他の道府県にもこの動きが広がって欲しいとした。



尾崎治夫東京都医師会長は、「このままでは、東京で医療・介護の対応ができなくなる」との思いから、たばこ対策に取り

組んできた」とした上で、都医が東京都三師会（都医、都歯科医師会、都薬剤師会）、東京都看護協会などと共に行った署名活動により、20万4000筆余りの署名が集まったこと（5月31日現在）を報告。「条例が成立すれば、禁煙に取り組む人達が増えることが予想されることから、今後は禁煙外来の整備等を進めていきたい」と述べた。

最後に、森亨たばこ健康問題NGO協議会会長が、「たばこ対策の運動は今、正念場を迎えている。本日成果を糧に、引き続き取り組みを進めていきたいと考えているので、ご協力をお願いしたい」とあいさつし、イベントは終了となった。



が進歩したとしても、喫煙者の生存率を高めることはできないことを説明し、喫煙者いかにアプローチしていくかが大きな課題だと指摘。

その解決策として、①喫煙は多くの疾患の原因となっており②たばこの煙には発がん性物質が多く含まれている——などの情報をあらゆる機会を使って、国民に伝えていくことを挙げ、そのためのさまざまなエビデンスを紹介した。

お知らせ

日医ホームページ掲載の「禁煙は愛」も、ぜひご活用下さい。

http://www.med.or.jp/forest/kinen/

南から北から

秋田県
秋田市医師会報
No.554より

特別賞

澤石由記夫

左利きだった私は、物心ついた頃からいつも怒られていた。今でこそ左利きは矯正しないように指導されるが、私が子どもの頃は左利きはみっともないもので、右利きへ変えてあげることが本人のためであり、早くから厳しくしつけられるのが正しいと信じられていた。しつけ「怒ること」考えられていた時代なので、記憶をたどれる3、4歳頃から、私はいつも怒られていた。

子どもは怒られてばかりいると、不安感や緊張感が強くなってしまふ。そのため、落ち着きがなくなり、間違いも多くなる。すると、それでまた怒られる。悪循環を繰り返す中、徐々に情緒不安定となり、ついには、ちよっとしたストレスで狂ったように泣き叫ぶようになってしまった。

小学校に入る頃には、現在使用されている注意欠陥多動障害(ADHD)の診断項目に全て当てはまる、じっとしてられない(多動)、そそっかしい(不注意)、興奮し

やすい(衝動性)大変な子どもになっていた。これまでの私の人生の中で最大の幸運は何かと聞かれたら、「小学校に入學しM先生に出会えたこと」迷いなく答える。まだ20代の若々しいM先生が、「教師になって4年間、ずっと上級生を担任していたので、低学年を担任するのはみなさんが初めてです。先生も一緒に勉強していきたく思います」と、教室で私達に初めて語り掛けた言葉は今も覚えている。

M先生はいつも優しく、私が不注意で間違ったり失敗したりしても、優しく励ましてくれて、怒ることはなかった。家に帰ると怒られてばかりでも、学校に行く先生が優しく接してくれるので、毎日学校へ行くのが楽しくしょうがなかった。そして、先生の前では、自然に自分も良い子になっていった。

小学校2年生のある日、M先生が珍しくみんなに説教をした。いじめや差別は絶対にしてはいけないと力説していた。

先生の優しい言葉に救われた。小学校2年の夏休み、朝読みの課題が出され、日付が記された朝読みカードを渡された。できたら〇、できなかったら×を毎日付けるようにとのことだった。

夏休みが終わって、朝読みカードを先生に提出する時が来た。周りの人達のカードを見たら、ほとんど〇ばかりだった。私の朝読みカードだけが〇と×とが半々くらいだった。

先生の優しい言葉に救われた。小学校2年の夏休み、朝読みの課題が出され、日付が記された朝読みカードを渡された。できたら〇、できなかったら×を毎日付けるようにとのことだった。

夏休みが終わって、朝読みカードを先生に提出する時が来た。周りの人達のカードを見たら、ほとんど〇ばかりだった。私の朝読みカードだけが〇と×とが半々くらいだった。

数日後、夏休みの朝読みカードの表彰式を行うとM先生が言った。私は、自分が一番×が多いことを知っていたので、表彰式をやると聞いてとても嫌な思いになった。全部〇だった人の名前が読み上げられ、先生の手作りの賞状が一人ひとりに渡された。

表彰式が終わった後、M先生が言った。「それから、特別賞があります。由記夫さんです」。私はドキンとした。きつと最下位賞をもらうんだと思

った。先生は言った。「由記夫さんは×が一番多かったです。半分くらい×です。でも、先生はとても嬉しく思いました。他の人は一つか二つしか×を付けていません。みなさん本当に正直に〇を付けたらいいか?先生はもっと×がいっぱいあったんじゃないかと思

います。朝読みのことを大切ですが、うそをつかないことはもっと大切で

す。由記夫さんは正直に×を付けてくれました。なので、正直賞をあげます」。

私は赤面した。正直だと先生が褒めてくれて嬉しくて赤面したのではなかった。「先生、ごめんなさい」との思いで、申し訳ない気持ちで顔を赤くしたのだった。実は、夏休み中に、私は朝読みを2、3回しかしていません。そのことを正直に書くことができず、自分なりに考えて、半分くらい〇なら許してもらえ

るのではないかと、その〇をたくさん付けていたのだった。そんなうそをつきの自分のことを信じてくれ、評価してくれるM先生の思いを知り、私は本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。そして、先生を裏切るようなことはもう絶対しないぞと心に誓った。

M先生は2年間私達を担任した後、別の小学校に転任していった。その後、成人式の時だったろうか、先生と久しぶり

に再会する機会があった。それから、毎年、年賀状をやり取りするようになった。

今から5年前の初冬のこと。一枚のはがきが届いた。「喪中のため新年

の挨拶を遠慮します」と書かれていた。差出人はM先生のご主人だった。急いではがきの文面を読み返した私は、その場から動けなくなった。先生との思い出の場面が頭の中をグルグル巡った。

そして、あの朝読みカードはうそでしたと、いつか告白しなければと思

っていたのに、もう絶対に言えなくなってしまうことを悔いた。

私にできるM先生への恩返しは、いつの時か再会した際に、「先生から頂いた特別賞は、私の人生に無駄ではありませんでした」と、胸を張って

言えるように、これから愚直な毎日を通じていくことだと思

う。宮崎は西に九州山地が連なり、東西を遮断している。多くの河川に注ぐ渓流沿いは、自然が残る多くの稀少動植物の宝庫で、綾や北郷、加江田

宮崎県
日州医事
第816号より

趣味は昆虫写真なのか、綾の散策なのか?

末岡 常昌

昆虫の生態写真を撮り始めて、早10年くらいになる。散策する林道で、「何の写真ですか」と聞かれ、「この年齢で『昆虫』というの大きな声では言いたくないな」と心の中で思ったこともあったが、養老吉野氏だつて「ゾウムシ」に凝ってデジタル写真集なる本まで出しているじゃないかと、最近には気にならない。

昆虫はチョウやトンボ、バッタにハチなど、生物の種の中で最も数が多い。私の興味は甲虫類、その中でも大きいクワガタやカブトムシには関心がな

い。何ミリレベルの、とても肉眼ではアリのクモと区別つかないような小さな昆虫、虫眼鏡がないと見分けられないような虫達がお気に入りなのだ。そのため、カメラもレンズもレベルアップした。朝露の残る林道に向か

うと、気温は18度前後。低木の常緑樹の葉の裏や裏を見て歩くと、黒いゴミ? 虫の糞のようにも見える固まりが、急に飛んで消えていく。やはり虫だったんだと後悔し、まず一枚そっと映し出す。ズームで見ると、黒いゴマのようなものが表面は紅い斑紋をちりばめた羽のテントウムシであったり、キノコムシだったりして感動する。

こうした発見は本当に一期一会の出会いで、その虫の生態の一瞬なのだ。「なぜ、ここに止まっていたのだらう?」「この葉が食草なのだらうか?」。いやいや、ダーウィンの言葉にあるように、それは誤解してしまふ一観察場面過ぎないのである。アリのように忙しく歩き回るカミキリムシ、陰になると気配を感じて葉の裏

や幹の裏に隠れてしまうゾウムシなど、息を凝らし身を強ばらせシャッターを押し、手持ちで撮る時間は止まったかのようであった。それでも数十枚の画像のうち、ピントが合った保存に耐えるものは一割程度しかない。

フィールドは溪谷や林道。宮崎は西に九州山地が連なり、東西を遮断している。多くの河川に注ぐ渓流沿いは、自然が残る多くの稀少動植物の宝庫で、綾や北郷、加江田

どこも素晴らしい。その中でも、綾は照葉樹林が保存され、落葉樹も常緑樹も幹の太さが1メートルを越す大木が多い。毎年のように同じ場所を訪れていると、倒木が朽ち苔生し、粘菌やきのこが生えるにつれ、訪れる虫達の種類が変化していく。

ブナ科やカエデの生木に穴を穿つキクイムシのために、いつの間にか枯死木となり、カミキリムシやゾウムシが訪れ産卵の場となる。こんな自然の森の変化は、街の近くの里山ではなかなか見ることができない。

綾の照葉樹林は常緑樹が多いが、林床は落ち葉で敷き詰められ、ヤマドリが林床を足早に通る過ぎ、シカの悲し気な鳴き声の間で……まさに「癒しの空間」なのである。



スマートカフェin医学部

～キャリアアップ座談会～

—富山県医師会—

富山県医師会では女性医師等支援事業として、相談窓口の設置や県内病院の巡回相談、富山大学医学部3年生への講義、富山大学附属病院でのキャリアアップ座談会、臨床研修医への説明会を開催している。

また、女性医師への育児支援制度の拡充のみでなく、男女共に若い医師がキャリアアップできる仕組みや医師全体の働き方の検討が必要であり、

本稿では、富山大学附属病院でのキャリアアップ座談会について紹介する。

座談会は、富山大学男女共同参画推進室、とやま総合診療イノベーションセンターと連携し、平成25年より年2回ずつ開催している。①育児しながら留学した女性医師②

これらの事業は全て、医師会員、大学関係者、病院医師など多くの方々の協力を得た上で推進している。全国で女性医師支援は熱心に取り組みされているが、富山県では特に大学と密接に連携を図っており、関係する方々

「～と名称を変更し、座談会に教授が出席されて講義以外の話が聞けるなどということもあって、参加者も増えている。」

「教授が若い頃に苦労したこと」「女性医師に対することが好評で、毎回多くの学生や若手医師の参加がある。中には「固定的性別役割分担意識」を払拭するような爽快な話もあって、そのアイデアや工夫はとても参考になるし、笑える失敗談も楽しい。」

これまでに産婦人科、小児科、内科、眼科、外科、整形外科、総合診療科の医師に講師となってお話し頂いたが、最近では、まだ女性医師の活躍が少ない科である泌尿器科医、心臓血管外科医にもご講演頂いた。

平成30年1月からは、講師と同じ科の富山大学教授と若手医師のペアトークも同時に行い、新たに「スマートカフェin医学部」キャリアアップ座談会を開催している。

「医師の高齢化」「医師不足」「地域偏在」「医師の働き方」が大きな問題となっているが、男女を問わず医師が健康に働き続けられる環境の整備を目標として、若い医師が意欲と責任感をもち、ますます活躍していけるよう女性医師等支援する。

案内

平成30年度 第49回全国学校保健・学校医大会

- ◆メインテーマ：「子どもは国の宝。次代を担う子ども達の健やかな成長を願って」学校医の果たす社会的意義」
- ◆主催：日医
- ◆担当：鹿児島県医師会
- ◆日時：10月27日(土) 午前10時～
- ◆会場：城山ホテル鹿児島(〒890-8586 鹿児島市新照院町41番1号)
- ◆参加者：日医会員及び学校保健に関係のある専門職の方
- ◆参加費：20000円(昼食・懇親会費を含む)
- ◆申込方法：都道府県医師会を通じて行う。または、大会専用ホームページから申し込む。
- ◆主なプログラム：
 - 分科会
 - ①からだごころ①心臓、腎臓・尿管、成長曲線、その他②運動器、生活習慣病③ごころ、特別支援、発達障害、アレルギー、感染症、色覚健康教育、④耳鼻咽喉科、⑤眼科
 - 開会式・表彰式
 - 基調講演：「ヘルスプロモーションの理念に立

ちかえり、改めて学校医の役割を考える(池田琢哉鹿児島県医師会会長) ●シンポジウム「次代を担う子ども達の健やかな成長・発達のために」 考えよう学校医の果たす役割」

健康教室)について(仮) (田代達也始良地区医師会学校・母子保健委員会担当)

③「特別支援学校の現状と課題(仮) (橋口知鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系)

④「子どもの発達に大切な愛着と睡眠(仮) (増田彰則増田クリニック院長)

◆特別講演「薩摩の歴史と教育について(仮) (加来耕三氏/歴史家・作家)

◆問い合わせ先：日医健康医療第一課(☎0339426138(直)) ※当日は会場内に託児所を無料で設置する予定。利用希望者は大会事務局に連絡頂くか、申込フォーム(備考欄)にその旨を記載願いたい。

日本医師・従業員国民年金基金 案内

特定加入(60歳以上の加入)について

国民年金法の改正に伴い、平成25年4月より、60歳以上の方でも国民年金基金への加入が可能となった。

対象者は、60歳以上の国民年金任意加入者の方で、医業に従事している方となる。

加入に際しては、市区町村の国民年金課または最寄りの年金事務所において国民年金の60歳以上の任意加入の申し出の続きを済ませた上で、現

「生命を見つめるフォト&エッセー」募集チラシ 配布ご協力をお願い

「生命を見つめるフォト&エッセー」(主催：日医、読売新聞社)では、人間や動植物のいのちの輝く一瞬をとらえた写真や医師や看護師、患者との交流をつづったエッセーを、現在募集しています[応募締切：2018年10月4日(木)]が、このたび、作品募集のチラシ(A4版表裏)が完成しました。



待合室や廊下のラックなどに置いて、作品募集にご協力頂ける会員の先生方がおられましたら、①お名前②送付先を明記の上、下記のメールアドレスまたはFAXによりお知らせ下さい。何卒ご協力の程、お願いいたします(1カ所につき30部を送付いたします)。

問い合わせ・申し込み先：日医広報課 ☎03-3942-6483(直) FAX03-3942-7036 present@po.med.or.jp



座談会に参加した若手医師と講師の交流の様子。

詳しいパンフレットも用意しているので、加入希望者は、ぜひ、基金事務局(☎01200700650)まで問い合わせ願いたい。